

# 全小国研会報

No.95

発行所  
全国小学校  
国語教育研究会  
事務局  
清瀬市立  
清瀬第四小学校  
事務局長 沼正城



## 全国小学校国語教育研究会創立五十周年記念 第五十二回全国大会 熊本大会を終えて

全国小学校国語教育研究会  
会長 佐伯孝司

一月、熊本県で全国小学校国語教育研究会大会を開催しました。会場に参集する先生方とオンライン配信でつながる先生方が、講演や発表、協議等を通じて共に学び合うことができました。新たな形で、五十周年の節目に相応しい大会にすることができましたこと、深く感謝申し上げます。

本大会の副主題として、「学びを自覚する」「共に更新し続ける」という二つの重要な視点が掲げられています。本会理事会でも、自治体をまたいでの研究の進め方、思考の深まりと言葉の力、学習評価等についての課題について話題になりましたが、本大会の研究には、解決に向かうための手がかりがたくさんありました。学びのつながり、ゴール、価値をどのようにして自覚できるようにするのか、互いの考えの共通点や相違点に気付き、根拠や理由付けをしながらどのようにして納得解を生み出していくのか。それらを大切にしながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、熊本県内、九州各県が同じ視点実際の授業や実践発表に取り組み、大会主題「未来を拓く言葉の力を培う 国語科学習の創造」に向かうプロセスを発信することができたと考えます。

大会においては、文部科学省初等中等教育局課程課教科調査官 大塚健太郎様、作家 重松清様、安田女子大学教授 田中宏幸様に、貴重な御講演をいただきました。これからの国語教育の推進のための方向性、言葉の教育の価値や視点の転換、授業づくりへの具体的な課題とその解決策等、多くのことを学ぶことができました。また、全国各地の先生方からの実践成果の発表、オンラインでの協議でも、学びを深めることができました。本紙にその内容を特集しておりますので、ぜひ御覧ください。

開催にあたっては、九州小学校国語教育研究協議会会長 清田浩文様、熊本大会運営委員長 齊藤正信様をはじめ、熊本県小学校教育研究会国語部会及び熊本市小学校国語教育研究会の皆様、多大なる御尽力、御理解と御支援をいただきました。関係の皆様方に心より感謝申し上げます。

今年度は、広島県で第五十三回全国大会を開催いたします。全国の素晴らしい研究活動から、皆様と共に学ぶことができるよう努めてまいります。御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(東京都渋谷区立上原小学校長)



## 第五十二回全国小学校国語教育研究会 熊本大会を終えて

熊本県小学校教育研究会国語部会  
会長 清田浩文

一月二十六日(木)～一月二十七日(金)に、アークホテル熊本城前を主会場にして、全国小学校国語教育研究会創立五十周年記念第五十二回全国小学校国語教育研究会熊本大会を第六十三回九州小学校国語教育研究会大会並びに第六十六回熊本県小学校国語教育研究会大会と兼ねて開催しました。会場には約一〇〇名が集まり、約五〇〇名がオンラインで参加しました。

大会主題「未来を拓く言葉の力を培う 国語科学習の創造」学びを自覚し、共に学び続ける子供の育成」を掲げ、馬原大介研究部長を中心とした熊本県小国研の研究部のメンバーが、二年前から事前研究会を重ねてきました。そして、大会の半年前からは授業者とのやり取りを繰り返して大会に備えました。事前に東京・広島並びに九州各県の代表十二名の授業者が作成した授業動画を大会の一週間前から公開し、それらの視聴を基に、大会当日、オンラインで分科会を開催しました。

文部科学省教科調査官の大塚健太郎先生からは学習指導要領に関する詳細なご講演を、広島大学名誉教授・安田女子大学教授の田中宏幸先生からは、具体的な授業実践に関するご講演をいただきました。最後に、作家の重松清氏から「ことばの力」読書で育む想像力」と題して記念講演をしていただきました。「小説は新しいものの見方を教えてくれる」ということ、「言葉は思いに決して追いつかない」ということ、「国語の授業には迷うことのできる豊かさがある」ということを学ぶことができました。

合計六一〇名の参加を得て、無事に大会を終えることができました。大会の開催にあたりまして、ご後援をいただきましたすべての団体の皆様、多くのご助言をいただきました佐伯会長並びに全国小学校国語教育研究会の役員の方、九州小学校国語教育研究協議会の理事・事務局の先生方、各都県の授業者・司会者・助言者の先生方、そして本県の溝上剛道事務局長を中心とした各部長並びに郡市理事・事務局の先生方、すべての役員の先生方に心より感謝いたします。誠にありがとうございました。



# 未来を拓く言葉の力を培う国語科学習の創造

## 「学びを自覚し、共に更新し続ける子供の育成」

### 一 研究のねらい

本研究における「未来を拓く言葉の力」とは、

『予測困難な時代を生き抜くために必要な言葉の力』である。

今日の子供たちが成人して社会で活躍する頃には、予測困難な時代が到来し、社会の在り方そのものが現在とは「非連続」と言えるほど劇的に変わるとされている。このような時代にあつて学校教育には、一人一人の子供が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、「持続可能な社会の創り手」となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

以上のことを踏まえ、国語科においても、子供の実態に寄り添い、きめ細かく指導・支援することはもちろんのこと、子供自身が学習の状況把握し、主体的に学習を調整していく機会や、他者と協働して学び合う場を一層充実させていくことを通して、予測困難な時代を生き抜くために必要な「未来を拓く言葉の力」を子供に培っていくことが重要であると考えた。

### 二 研究の視点

(一) 学びを自覚するための手立て

- 学びの土台となる導入
- 学びの指針となる「学習課題」
- 立ち止まって振り返る場
- 考えを表出し、比較する場
- 納得解を生み出す根拠や理由づけの充実

### 三 研究の実際

「二 研究の視点」に基づき、授業者・提案者の勤務校を中心に熊本県において研究を進めた。詳細は、後述の分科会資料をご覧いただきたい。

### ■分科会I■【一年 話すこと聞くこと部会】

- ・単元名 よくきいて、ともだちのことをしようかいしよう
- ・教材名 ききたいなともだちのはなし（光村図書一年下）

実践発表者 新宿区立落合第二小学校 教諭 井上 奈々 先生

### 一 主な発表内容

○ 学びを自覚する手立てとして、教師が実演するモデル動画とそのシナリオを教材とした。その手立てにより、子供は意欲的に、共感して聞くための態度や、さらに詳しく友達のことを知るための質問の仕方（聞き方のこつ）を捉えられるようにした。さらに、適宜このモデル動画を活用し、子供が自らの学びと比べ振り返り、自分の学びを自覚することで聞き方のこつを習得できた。

○ 共に更新するための工夫として、話し手の子供に質問を受けた時の感想を聞き、話し手の満足度を確かめる時間を設定した。そうすることで、聞き手が聞きたいことを聞き出せるような聞き方や、聞き手側の姿勢、表情、質問などの態度や聞き方のこつについて振り返ることができた。その振り返りを共有していくことで共に学びを更新することへとつながった。

### 二 指導・助言

指導助言者 文京区立千駄木小学校 山口 麻衣 先生

○ 求めて聞く力、そのためには対話する子供同士が互いに聞きたい情報を明確に意識した上で、どうやったらその情報を聞き取っていけばいいのか自覚することが重要。そういった対話を通して試行錯誤できる言語活動を設定し、求めて聞く力の育成に努めた。

○ 学びを自覚するための手立てとしての振り返りカード活用は有効に機能した。それは、やはり聞く力として何が必要か自分たちで考えて設定しているからであろう。その目指す姿から今の自分に何が必要か振り返って自身の聞く姿を自覚することができた。

○ 対話を通しての満足度や、聞き手としての聞き方を比べたりしながら感想交流をしていく中で、子供たちは考えを表出し、学びを更新し合っていた。その結果、子供の対話する姿勢は確実により良いものになっていった。また、モデル動画から学び取った、より良い聞き方の納得解を活かしながら対話を継続していったことで、子供たちの姿が変容し、友達の新たな良さに気づくという姿まで見ることができた。

## ■分科会I ■【二年 書くこと部会】

・単元名 まとまりに分けて、お話を書こう

・教材名 「お話のさくしゃになろう」(光村図書二年下)

実践発表者 広島市立舟入小学校 教諭 作花 詞子 先生

## 一 主な発表内容

○学びの土台づくりとして「始め、中、終わり」で文章をまとめた既習学習を振り返り、お話の構成について思い出せるようにした。また、朝読書や読み聞かせ、昔話出前授業等を実施することで、多様な人物像や物語の展開を知ることができるようになり、自分のお話作りに生かせるようにした。

○子供が自分の考えを表出し、比較することができるようになり「始め、中、終わり」に分かれたシートを作成し、友達と対話をしながら構成を考えられる場を設定した。お互いの物語をもっと詳しくしたり想像していることを言語化したりするために、足りない部分を質問し、メモを増やしたり書き換えたりすることができるようになった。

二 指導・助言 指導助言者 広島市立五日市南小学校 岡田 由佳先生  
○四年生に、作ったお話を読んでもらうというゴールは、目的意識と相手を意識を持たせることができ、指導事項を子どもたちに身に付けさせるために効果的で主体的な学びにつながる。ゴールとして示すだけでなく、四年生に伝わる構成にするには、四年生が喜んでくれるにはどうすればいいかなど毎時間意識させることで学びの必然性が生まれ、深い学びにつながると考える。

○前時の振り返りを導入で紹介することは、自分の学びを調整し、学びを自覚することや指導者の授業改善にもつながる。今後は、様々な振り返りがあることを意識させ、振り返りの視点を提示していくことで深い振り返りにつなげていってほしい。

○友達に質問し、アドバイスをもらうタイミングが書き手、聞き手双方にとって、いいタイミングだった。今後は、質問やアドバイスをする前時までに、どれだけ課題意識を持たせておくかが重要である。自分自身や作品と対話する時間を事前に設定し、加筆修正することについて自分なりの答えを持っておくと前時と本時がつながり、より効果的な活動になると考える。

## ■分科会I ■【二年 読むこと部会】

・単元名 どうぶつの本を読んで、「どうぶつのひみつクイズ」を作ろう。

・教材名 「ビーバーの大工事」(東京書籍二年下)

実践発表者 川棚町立石木小学校 教諭 北川 翔太 先生

## 一 主な発表内容

○学びの土台作りとして、動物に関する図鑑や、すみかや食べ物に特化した本を学級文庫として紹介し、学習意欲を高められるようにした。その後、指導事項と言葉の力を身につけさせるために「どうして? どうぶつクイズを作ろう。」という学習課題を設定した。また、立ち止まって振り返る場として、単元計画・身につけたい力・学習活動を教室内に掲示し、毎時間授業の導入で確認を行っていった。他にも、学習を通して「調べ方名人のわざ」を増やしていき、授業の振り返りで学びを蓄積していくことをねらった。

○考えを表出し、比較する場の設定のために、子供たちがお互いにとの「びっくりポイント」を調べているかわかるように表に名前を記入するようにした。そのうえで、同じ「びっくりポイント」を調べている相手とのペア交流を実施し、お互いに称賛したり、答えを探せずにいる子へアドバイスをしたりし、自分の考えを修正することをねらった。

二 指導・助言 指導助言者 川棚町立石木小学校 喜多 三郎 先生  
○学びの土台作りとして、学級文庫等を活用しながら教育環境を整えたこと、子供たちが学びのつながりやゴールの姿を見通すことのできる課題設定を行ったこと、それらの工夫が子供たちが主体的に学ぶ姿につながっていた。また、ワークシートや壁面の掲示物などで、子供たちの思考や学びの蓄積を見える化し、振り返りに活用することで学びの自覚を促していた。

○交流の場面では、同じ視点でクイズを作っている友達と交流することで安心して交流ができ、よりよいクイズ作りにつながっていた。また、子供たちに学び方(友達と交流するのか、個人で考え続けるのかなど)を任せることで、個別最適な学びや協動的な学びの姿も見られていた。○クイズ作りの際に、目的意識だけではなく、「誰にクイズを出すのか。」という相手意識を持たせると、伝え方の工夫なども見られたのではないかと。

## ■分科会Ⅰ■【三年 話すこと・聞くこと部会】

・単元名 話の中心が伝わるように、すきな時間を話そう

・教材名 話したいな、わたしの好きな時間（東京書籍三年上）

実践発表者 宮崎大学教育学部附属小学校 教諭 佐藤 健一 先生

### 一 主な発表内容

○学びの土台づくりとして、二年時に学んだ単元を取り上げ、想起することで、既習と本単元との相違点を捉え、学びのつながりを自覚できるようにした。

○学びの指針となる「学習課題」として、既習教材「すいせんのラップ」の中で登場する蟻が好きな時間を仲間話す場面を設定し、書き出しメモの特徴から話の中心の意味を理解し、蟻とのやり取りを通して思考する内容を確認することで、単元の学習課題を設定した。

○共に更新するための工夫として、考えを表出し、比較する場の設定や納得解を生み出す根拠や理由づけの充実を図った。

### 二 指導・助言 指導助言者 宮崎市立本郷小学校 沼田 重明 先生

○「つなぐ」を大切にされた実践だった。既習単元とのつなぎ、生活経験とのつなぎ。このような取り組みを積み上げることが大切。そして、更新するために、協働的に、主体的に学ぶ姿が見られた授業であった。児童に任せすぎてもいけないし、教師が主導となってもいけない。課題が「〜について考えよう」等では、焦点化できない。「〜の方法はよかったのか」等、具体的な課題を持たせたことが効果的であった。

○中学年の児童にとって、相手や目的を明確にすることが大切であり、そのポイントは、自分の伝えたいことの中心が、聞き手にとって分かりやすいかどうかであろう。耳で聞いたことを視覚化すること、マトリックスやイメージマップ、付箋の活用も効果的である。

○児童を目標に到達させることが大切で、そのためには、活動の焦点化、学習の流れをシンプルにすることがポイントとなる。様々な活動の中から、最適な活動を選ぶこと。話し合いであれば、一つに焦点化すること、よさを出し合うのか、これを明確にすることで、指導のポイントも明確になるし、児童も共通イメージをもちやすい。学習の流れの明確化が、分かりやすい授業、焦点化した授業につながる。

## ■分科会Ⅰ■【四年 書くこと部会】

・単元名 理由や例を示して、よさが伝わるリーフレットを作ろう

・教材名 伝統工芸のよさを伝えよう（光村図書四年下）

実践発表者 福津市立神興東小学校 教諭 杉本 竜也 先生

### 一 主な発表内容

○学びの土台づくりとして、様々な伝統工芸について調べた活動から自分が価値を感じたものや、もっと知りたいと興味をもったものを選択できるようにした。その後、リーフレットでよさを伝えるという言語活動を設定した。また、立ち止まって振り返る場として、毎時間記述すると共に、リーフレットをタブレット端末での作成をすることにより、進捗状況の客観的把握、前回の自分の考えについても変容の自覚につなげた。

○子供が自分の考えを表出し、比較することができるように構想段階でのメモを作成し、友達と見せ合う場を設定した。リーフレットを作成する中で、友達から読者の視点としてよさが伝わっているかアドバイスをもらうことができるようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 宗像市教育委員会 末崎 浩嗣 先生

○目指す子供の姿をもち、資質・能力を身に付けるためには、一体的に、長期的に、一人一人に、これら全てが重要である。今回は、授業のねらいに向けて学習の見通しをもった単元デザインができていくことがよかった。子供が内容や方法、目的を分かりながら学ぶことが、個別最適な学び、協働的な学びにつながっていく。

○教師の役割として、ねらいと枠組みをもち、ゴールへ導くコーチとしての役割、個別と助言を行うアドバイザーとしての役割、多様な意見を引き出しまとめていくファシリテーターとしての役割を果たすことが大事である。また、ジェネレーターとして子供と一緒に作り上げていくことも子供にとって深い学びにつながっていく。

○授業の要素として、子供・教材・教師のつながりが重要である。子供が受け身になると学びの深まりが生まれない。子供が教材に働きかけていても学びが形成されていないと学びが成立しない。子供と教材にどのような関わっていくかを教師が見取る共同注視の関係であることが、授業での学び、形成的評価につながる。

■分科会Ⅰ■【四年 読むこと部会】

・単元名 中心となる語や文をつなげ要約し

「大分の伝統工芸のひみつカード」を作ろう

・教材名 世界にほこる和紙（光村図書四年下）

実践発表者 白杵市立南野津小学校 教諭 成松 千穂 先生

一 主な発表内容

○第一次において、和紙や伝統工芸の実物やネット記事などの資料を見せ、もっと見てみたいという気持ちを大事にして導入を行った。要約文と文章を比較することで読みやすい要約を作っていくことを確認した。第二次では、教材文をもとに要約の仕方を学んだ。さらに、大分の伝統工芸の文章を提示し、子供たちが選択した文章を字数を意識して要約し紹介カードを作った。このようにして、今までの学習を生かすことができるようにした。

○中心となる語を見つける際に、どの段落に出てくる語なのか一枚の教材文に考えを位置づけ、思考を可視化した。要約の目的に立ち返り、具体的な事例をまとめる抽象化された語を探し納得解に導けるようにしたが、子供たちにとっては難しい部分もあった。

○めあてに関して、筆者にとつての魅力なのか、子供たちにとつての魅力なのかあいまいになった。この後の説明文教材との系統を考えるなら、筆者の魅力として扱うべきだった。

二 指導・助言 指導助言者 日田市立津江小学校 山口 健 先生

○要約指導には難しさがある。令和三年度全国学力調査の結果で正答率三割を下回っていたが今でも改善されていない。要約の指導には段階がある。本単元では、意味段落の要点をつなげることを目指して、本論の部分をまとめるようにした。「学校のみなが読みたい」と思わないから序論・結論ではなく魅力をつけた方がいいという必要感のもと本論の要約を行ったことがよかった。

○キーワードを見つける時に、一枚にまとめた文章を使うことで構成が捉えやすかった。国語は、写真などの非連続テキストと連続テキストを関連させて読むことも大事である。

○主語意識を押さえたためあての検討、付けたい力に適した学習展開の検討も必要であると考ええる。

■分科会Ⅰ■【五年 読むこと部会】

・単元名 作品を自分なりにとらえ、「大プロジェクト」を製作し、朗読をしよう

朗読をしよう

・教材名 大造じいさんとがん（東京書籍五年）

実践発表者 鹿島市立鹿島小学校 教諭 花島 宏明 先生

一 主な発表内容

○児童自らが創り上げる国語の学習を目指し、単元の導入でスタート（身に付けて欲しい力）とゴール（学習活動）を提示し、ゴール達成のために必要な活動を子供と共に考え、学習計画を立てた。

○学習の終末に書かせる振り返りでは、前の学習や単元とのつながり（過去思考）、これからしてみたいこと（未来思考）、本時の学習（現在思考）の三つが繋がることを意識させた。授業の始まりは、子供の振り返り（未来志向）からめあてに繋げ、学びを自覚するための手立てとした。

○人物像を表す「解説カード」を、グループや全体で見比べ、微かなズレを互いに比較検討し合ったり更新していったりすることで、考えや理由付けを整理したり再検討できるようにした。教師が、カードの中の心情が外化する動詞や助詞などに着目させ、対話を仕組んだ。

二 指導・助言 指導助言者 嬉野市立塩田小学校 橋本 幸雄 先生

○児童の朗読をビデオに撮ることで、単元の最初の方の朗読と最後の方の朗読の違いがよく分かった。学びを朗読にいかすことができていた。また、朗読だけ表現することが難しいことを、解説書を書くことで補うことができていた。

○指導事項の読むこと（2）ウのために、単元後の活動として、地域の偉人の本を今回の言語活動風に朗読するなどの活動に生かすこともできたのではないか。学んだことを生活に生かすことが大切と考える。○児童の朗読を聞いた保護者の感想が良かった。最近の児童の自己肯定感は低い状態にある。朗読のビデオを見た保護者から褒めてもらうことで、児童は、自尊感情が高まったと思う。

○おそらく、作者には、作品をその子なりに味わって欲しいという思いがあると思う。わかりにくさを分かって追いついて欲しいという思いが感性と情緒を育むことになると思う。

## ■分科会Ⅰ■【五年 書くこと部会】

・単元名 自分の考えが伝わる「なるほどレポート」を書こう  
 ・教材名 グラフや表を用いて書こう（光村図書五年）

実践発表者 甲佐町立龍野小学校 藤田 沙織 先生

### 一 主な発表内容

○提示文を検討する際、筆者の書き方の工夫を振り返り、どの説明のポイントが使えるか全体で確認することで、見通しをもって書き直すことにつなげた。

○資料と文章を赤線でつないだり、班同士の書き方の違いに注目させたりすることで、より納得する文はどれか比べながら検討できるようにした。

○班や全体での話し合いを通して、「自分の文章は筆者の書き方の工夫を生かしているか」、「資料と関係付けた説得力ある内容になっているか」等について見直す姿を価値づけることで、一人一人が言葉への自覚を高めながら納得解を生み出すことができるようにした。

二 指導・助言 指導助言者 山都町立矢部小学校 山下 淳子 先生

○学習指導要領の前文でこれから求められる力が明記されている。資質・能力、令和の日本の教育の構築のため、未来を拓く言葉の力が重要となる。本単元は、読むと書くの複合単元であった。書きたい・書けそうだと引き出す工夫があった。読み手を意識し、資料を用いた説明の工夫の活用が効果的にできるか、子どもの問から学習活動をつくるなど、相手意識・目的意識で意欲が引き出されていた。前時のふり返りの発表から意欲と見通しをもって本時の活動へとスムーズにつながった。

○赤線を引くなど着目点や思考の可視化がなされ、一人で書く↓班で検討↓他の班へ学ぶといった姿が、日常的に友達から学ぶ様子もうかがわれた。個人で書けない子は、班での学びから書き進め、すべての子どもたち個別協働な学びがなされていた。

○教室にたくさん資料が準備されており、学習環境の整備もなされていて子どもたちが学ぶ場として適切であった。終わりに「みなさんの宝物です」という教師の言葉があり、今日の学びは、これからの社会を生きていくための宝物となっていくであろう。

## ■分科会Ⅰ■【六年 話すこと・聞くこと部会】

・単元名 卒業タイムカプセルプロジェクト〜8年後の「あなた」へ送る「わたし」の動画メッセージ

・教材名 「海の命」「今、私は、ぼくは」（光村図書六年）

実践発表者 鹿児島大学教育学部附属小学校

教諭 原之園 翔吾 先生

### 一 主な発表内容

○児童の生活の文脈に即した必然性のある言語活動として、卒業タイムカプセルに動画メッセージを入れることを位置付けた。学びの土台づくりとして、単元の初めに動画撮影に挑戦し、成果と課題を明らかにする話し合い活動を設定した。振り返りでは、ノートに記述することに加え、動画に「話す」ことで残すようにした。

○文字化資料や動画資料を活用することで、音声言語を可視化した。また、児童が学びを組み立て、発展していく「学び方」の育成をねらいとした取組を行った。本単元に限らず、児童が自分たちで「学び方」を発揮した際に価値付けたり、教師自らが問い返したり、根拠を明確にしたりする学び方のモデルを示した。

二 指導・助言 指導助言者 鹿児島市立喜入小学校 内村 英人 先生

※指導助言者不在のため、分科会の協議の内容を掲載

○話すこと・聞くこと領域と、読むこと領域の二つにまたがった実践であることに難しさを感じた。「海の命」で太一や他の登場人物から学んだ生き方をどのように生かしていくのが重要である。また、オリジナルの教材開発を行った際、そこでの指導事項を教師が明確にもっておかなければいけない。

○学級経営が、素晴らしい実践につながっている。児童の実態を捉え、どのような壁を設定していくのかを吟味し、その上で必要な手立てを考えて授業づくりにつなげようとしている。

○東京書籍は、巻頭詩から「いのち」、生き方満載のつくりととなっている。其々の教材から学んだ生き方を全て繋ぎ振り返り、最後の説明的文章（まとめの文が抜いてある）と出会う。題名の「プロフェッショナルたち」の「たち」に、それこそ、将来の自分が加わる、というところが本実践とのつながりでもある。

## ■分科会Ⅱ■【一年 読むこと部会】

・単元名 せつめいする文しよをよんで、じどう車ずかんをつくらう。  
 ・教材名 「じどう車くらべ」(光村図書一年)

実践発表者 福岡市立田島小学校 教諭 江藤 駿 先生

### 一 主な発表内容

○学びの土台作りとして、これまでの説明文の学習を振り返り「問いに  
 対する答えを見つけて読む」などの経験を想起させた。次に、題名と  
 冒頭文を読み、言葉と挿絵、生活経験をつなぎながら自動車同士の違  
 いに着目し、それぞれの自動車の「しごと」と「つくり」を意識でき  
 るようにした。そして、読んだことを生かして自動車図鑑を作るとい  
 う学習課題を設定した。

○「読むこと」「書くこと」を交互に繰り返す単元構成を工夫することで、  
 学習を進めるごとに図鑑のページが増え、書き方を活用できるように  
 なる等の達成感や満足感を味わわせるようにした。そして、毎時間の  
 始めと終わりに振り返り活動を位置付け、学びの価値を自覚できるよ  
 うにした。

○自動車の「しごと」につながる「つくり」について話し合い、考えの  
 共通点や相違点を板書で整理していった。その際、子どもがどの言葉  
 に着目したか分かるように、文章と挿絵や生活をつなぎ構造的に表し  
 た。また、発問や問い返し、音読の工夫を行うことで、言葉の意味や  
 働きに気付かせたり、説明の順序を確かめたりした。

### 二 指導・助言 指導助言者 福岡市立東月隈小学校 鋤田 誠 先生

○「読むこと」と「書くこと」を交互に繰り返すことで、読む力書く力  
 がより高まっていた。また、「読むこと」と「書くこと」を分ける単元  
 構成よりも、子供たちの目的意識の連続が見られた。

○単元を通じた学習課題の中に、「読むこと」の視点、「書くこと」の視  
 点、ゴールの姿が明確に提示されており、見直しをもって単元を進め  
 ることができていた。

○低学年の説明文は、言葉を厳選し文章全体を短くするような工夫がな  
 されている。そこで、挿絵や子供たちの生活経験と文章をつなげるよ  
 うな発問、問い返しを行うことで実感を伴った言葉や文章の理解につ  
 ながり、確かな言葉の力が育まれていく。

## ■分科会Ⅱ■【一年 書くこと部会】

・単元名 思い出したことを順序に気をつけて書こう  
 「とっておきの思い出作文」

・教材名 「おもい出して かこう」(東京書籍一年下)

実践発表者 熊本市立託麻原小学校 教諭 中島 麗子 先生

### 一 主な発表内容

○学びの土台づくりとして、一年間の出来事を思い出す場を設定した。  
 入学後から書きためてきた絵日記や生活科のシート、行事の写真など  
 をみんなで振り返り、友達と話し合いながら、自分が書きたい事柄を  
 決めることができるようにした。また、学習の途中で、自分が伝えた  
 いことが相手に分かりやすい順序になっているか検討する時間を作  
 り、メモや文章を見つめ直すことができるようにした。

○自分の考えを表出し、比較する場として、出来事の順序が異なる構成  
 メモを提示し、正しい文章について考える活動を取り入れた。時間の  
 流れに着目し、初めて文章を読む人にも分かりやすいようにメモを入  
 れ替え、その理由を話し合う中で、構成についても考えることができ  
 るようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 熊本市立春日小学校 藤米田 成二 先生

○書きたい題材選びと学校生活の思い出の掘り起こしを丁寧に行った  
 ことで、子供達の生活経験の差を埋めることにつながる。思い出を共  
 有しながら対話することで書きたいことの補完ができ、それがさらに  
 意欲を高めることにつながったと考える。

○子供達一人一人が並び替えた理由を考え、全体で検討する時間を確保  
 し、分かりやすく伝えるためには順序が大切であることを実感したこ  
 とで、その後の作文の構想メモ作りに生かすことができた。情報の取  
 捨選択をしながら、既有知識や生活経験から理由付けを行い、自分た  
 ちなりの納得解を導き出すことができていた。

○振り返りの視点を明確にして、自らの学びを振り返る時間を設定する  
 ことで、今日の学び、次時の取組の確認ができ、ゴールまでの現在地  
 を確認できる。困っている子にとって有効である。さらに教師が「な  
 ぜそう思うのか」という問い返しをすることで周りの子どもたちとも  
 共有することができ、より深い学びにつながっていくと考える。

## ■分科会Ⅱ【二年 話すこと部会】

- ・単元名 みんなで話をつなげて、「おなやみそうだん会」を開こう
- ・教材名 そうだんにのってください（光村図書二年下）

実践発表者 神崎市立神崎小学校 教諭 高野那美 先生

### 一 主な発表内容

○学びを自覚するための手立てとして、指導者が作成したモデル動画を活用し、これまで学習してきたことについて振り返る場を設けた。その上で、今後身に付けたい力を見つめ、目標を立てていった。また、実際の話し方や仕草なども客観的に振り返ることができるよう、タブレットを活用した。そうすることで、自分に足りない部分やできるようになった自分を自覚しながら学習を進めることができた。

○共に更新するための工夫として、相談者の悩みは3名程度の回答者が順に回答していく際に、他の回答者の内容と自分の内容を比較し、共通点や相違点を見つけ出していった。また、他のグループの回答について、情報共有し、自分たちの話し方・聞き方と比較することで、自分たちが身に付けるべきこと、すでに身に付いていることについて共に学びを更新できるようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 神崎市立神崎小学校 重松 景二 先生

○題材として、子供によって話題となる悩みは大小様々であるが、現実味のある話題が非常に効果的だった。そして、何とか本気で相手に応えようとする中で話し合う力も伸びていった。

○子供は短い使用期間にも関わらず、タブレットを使いこなしていた。これまで客観的に自覚できなかった表情や言葉等視覚的に明確に振り返ることが可能になった。さらに、自分と自分、自分と友達を比べることでさらに次の対話への目的意識や意欲も生まれた。

○スターアップチャレンジが単元を通じて効果を発揮した。ステップアップしていく自分を自覚することで、次への学ぶ意欲も生まれていた。その意欲を活かし、すぐに試す場を設けたことも効果的だった。

○前時の振り返りから学びを始めることで、より良いパートナーになるべく今日の学びに活かしていた。また、二年生ということでも振り返りの観点を示したが、高学年になっていくにつれ不要になり、時間も短縮されていく。そのためには振り返りの積み重ねが重要である。

## ■分科会Ⅱ【三年 読むこと部会】

- ・単元名 食べ物のひみつ巻物を作ろう
- ・教材名 すがたをかえる大豆（光村図書三年）

実践発表者 大分市立明治小学校 教諭 水間 清香 先生

### 一 主な発表内容

○導入で、栄養教諭が「給食週間の企画として、食べ物ひみつ巻物を作ってほしい」投げかけ、子供たちに「どうしたら巻物を作れるのだろう」という問いをもたせた。そこで教師が、「すがたをかえる大豆」の説明の仕方を真似してみよう」と提案し、「国分さんの説明の仕方の工夫を読み、『食べ物ひみつ巻物』を作ろう」という学習課題をもたせた。

○学びのつながりを意識させるために、一学期の既習教材や一年生の時に学んだ教材を扱い、本単元に入る上でのハードルを低くし、どの子も参加できるようにした。また、毎時間終了後に学習の振り返りを書き、自分の学びを自覚できるようにした。

○「国分さんの例の書き方はなぜ違和感なく読めたのか」について考える際に、エラーモデルとの比較や、既習事項を根拠とすることで、国分さんの例の書き方の良さについての納得解を生み出せるようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 大分市立森岡小学校 牧 英治郎 先生

○複合単元とは、より読み解くための力（思考力・判断力・表現力）を書く活動を通して具体的に確かめるものである。

○評価は、「書くこと」の巻物作りにおいて、事例をどの順番で書いたかをたしかめるとよい。書く際に、つなぎ言葉を使わせるとよりよかつた。いくつかのまとまりを作り、順番を考えて書いていけば良いと評価できる。

○児童の中で、「工夫」「わかりやすい」という言葉の意味が入り乱れてしまっていた。児童の発言後、児童にもう一度問い返すことで、発言を大事しつつ、言葉の意味を整理することができたと思う。

○授業の中で、教師が、児童がことばの意味と働きに「たちどまって」ところを解きほぐし、整理し、さらに、価値付けることが大切だと考える。



## ■分科会Ⅱ■【三年 書くこと部会】

- ・単元名 登場人物や組み立てを考えて、ぼうけん物語を書こう
- ・教材名 「たから島のぼうけん」(光村図書三年下)

実践発表者 鹿児島市立喜入小学校 教諭 瀬戸口 礼果 先生

### 一 主な発表内容

○学びの指針となる学習課題としては、相手・目的意識を明確した上で、「登場人物や組み立てを考えて、四年生をハラハラドキドキさせるぼうけん物語を書こう」と設定した。学びの価値を自覚させるため、物語づくりに関心をもたせる段階、物語の書くコツを意欲的に探究する段階、粘り強く物語を書く段階で何をどのように学び、次に何を生かしていくかを共有するための振り返る場を位置づけ、その都度、教師が価値づけていった。

○考えを表出し、比較させるための場として、自分が主人公にしたい人物の特徴の共通性・類似性を踏まえ、物語の共同制作グループを作った。また、物語の下書き段階では、制作途中の作品を共有する場を設け、互いの作品のつながりを意識して創作できるようにした。納得する作品を生み出す根拠や理由付けとして、「三年とうげ」と他の物語の人物設定や組み立てを比較・関係づけながら、作者の構成の工夫が意識できるように単元構成を工夫した。

### 二 指導・助言 指導助言者 鹿児島市立吉田小学校 有村 恵 先生

○今回の授業では、前後の教材とのつながりを踏まえた教材研究が行われていた。読者を惹きつけるための構成の工夫、どのように書くかといった相談、それをグループ内で共同制作できたことがよかった。また、共同で取り組むことで、書くことへ苦手意識が高い子供も書くことができたという自信をもてたことは大きな成果である。

○完成した作品を四年生に見てもらったことで、その感想が三年生全体の自信につながっていた。物語が書けるようになるために、文学的 작품을読む、その読む視点の中にももしろさにつながる表現や構成という視点で読むことも大きな学びとなった。

○グループでの共同制作であったため、一人の力で書き終えたという達成感や個別の評価については今後の課題である。この実践が完成されたものではなく、これからの実践の中でさらに深めてほしい。

## ■分科会Ⅱ■【四年 話すこと・聞くこと部会】

- ・単元名 目的や役割を意識して話し合う みんな納得学級会を開こう
- ・教材名 クラスみんなで決めるには(光村図書四年下)

実践発表者 あさぎり町立免田小学校 教諭 高濱 寿枝 先生

### 一 主な発表内容

○学びを自覚するための手立てとして、実際に自分たちが班で話し合っている様子を撮影し、視聴した。課題やその解決方法を考え、共有し、学習課題として設定した。

○共に更新するための工夫として、話し合いのモデルとして、教科書のグッドモデルと、教師作成のバッドモデルを比較し、その違いから話し合いの課題の解決方法を探す場面を設定した。その中から意見を絞り込む方法に重点を置き、意見の整理の仕方や絞り込む視点の決め方について考える学習を行った。そして、具体的な話し合いの場面を提示し、その学びを活用する活動を設定することで、そのよさや必要性を感じるようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 人吉市立西瀬小学校 浅生 昇一郎 先生

○学級会のモデル動画を視聴したことで課題意識が高まったため、動画終了後、児童のつぶやきが始まった。そこで、「意見整理の仕方や絞り込む視点はどうかやって決まったのか？」と教師から示した。この問いにより学習を焦点化することができた。学習支援として、動画だけでなく、シナリオ(文字言語)を活用したことで、児童の学びの土台を揃えることもできていた。

○課題を焦点化するために、今までの話し合い活動を振り返り、顕在化させた。つまり思考の方向性を揃えることができた。子どもたち同士で関わり合うこと。話し合いを通して、相手の意見を聞き、認めること。相手に伝わるように言葉を選び、伝え方を工夫する優しさのある関わり合いに結びつけることができたのではないかと。

○教科書の文言を「目的」と一般化した。それを具体化する。この活動は、概念の再構成であり、この思考が「そうか、そういうことか」と知識の概念化につながった。この具体化と一般化が、大切であり、体験が知識とつながることを重視した実践であったと思う。

## ■分科会Ⅱ ■【五年 話すこと・聞くこと部会】

- ・単元名 説得力のある提案を作り、「5年2組プレゼン大会」をしよう
- ・教材名 「提案しよう、言葉とわたしたち」

実践発表者 長崎市立西町小学校 教諭 近藤 拓斗 先生

### 一 主な発表内容

○「プレゼン」について知り、意欲を高めるために、既習事項の確認や教師の模範の視聴等を行った。また、学びの指針となるよう、「指導事項＋言語活動」で学習課題を設定し、何を学ぶためにプレゼン大会があるのか意識付けした。振り返りでは「なしともも」の視点を与えた上で、タブレット端末を用いて学びを蓄積したり全員の振り返りを可視化したりした。

○本時においては、正しい構成に入れ替えたり、事実や感想、意見を当てはめたりすることで、比較・検討する場を位置付けた。その際、タブレットの付箋機能を活用し、思考を整理しながら話し合いを行った。また、「納得解を生み出す根拠や理由づけの充実」として、どんな言葉を活用すれば相手にはつきり伝わる構成になるか話し合うことで、文末表現を根拠として説明できるようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 長崎市立虹が丘小学校 松坂 眞一 先生

○共に更新するための工夫は、全ての授業を行う上で重要な視点である。授業における対話の重要性は周知のことであるが、本当の意味での対話になっているのかを考えるべきである。書いたことを読み、何となくで捉えるのではなく、理由を吟味し、子供なりに追求して比較・検討しなければならぬ。そのための工夫として、本時においてはICTの活用により思考の可視化が図られ、効果的であった。

○学習活動の中で、三人組で一台のタブレットを使う場面があった。三人で行うことにより、指差しながら自分の考えを前のめりになって伝えようとしたり、自分が考えた理由を話題に話し合いを進めたりする様子が見られた。

○「授業動画の視聴」という形式により、授業者の意図をテロップで流していたことで、授業に対する理解が深まった。学級経営によって構築された信頼関係を基盤としたクラスの姿や真剣に取り組んでいる様子は実際に参観してこそ伝わる素晴らしいものだった。

## ■分科会Ⅱ ■【六年 書くこと部会】

- ・単元名 書き表し方を工夫して、経験と考えをまとめた「卒業文集」を作ろう
- ・教材名 大切にしたい言葉（光村図書六年）

実践発表者 宮崎市立大塚小学校 齊藤 友則 先生

### 一 主な発表内容

○「構成メモを自分の考えが十分に伝わるような文章にするにはどうしたらよいか」等、前時学習後の思いを生かし本時の課題を設定した。

○モデルの文章と不十分な文章の具体的な文章箇所と付箋を取り上げながら友達の考えを比較させ、「書き表し方のポイント」に対するそれぞれの考えを検討し合うことができたようにした。

○見つけたものがどのような書き表し方の工夫なのか根拠や理由付けをしながら話し合うとともに、教師が適宜、問い返しを行うことで考えをより深めさせ、「書き表し方のポイント」（納得解）としてまとめることができるようにした。

### 二 指導・助言 指導助言者 宮崎市立大塚小学校 阪元 聡 先生

○学びを自覚する手立てとして、対象と言葉、言葉への自覚を高めることを意識して土台作りをしてあり、子どもの問いから課題を設定し、学びを内省させる場があった。振り返りシートによる自己評価が位置づけられて、効果があつた。

○一人一人の児童が言葉に対してどう感じているか、言語感覚の違いがある。「よさ」と「違い」についてどのように扱っていくか今後の課題であり、それを考慮した学習の土台作りが期待される。

○共に更新するための工夫として、可視化し、ワークシート、付箋による話し合いをすることで、児童が自分の考えを更新でき、納得するための手法として効果的である。考えを表出するのは、シンキングツールだけでなく、個に応じた表出の工夫、アウトプットのための他者の考えのインプットを考えながら、対話、協働で学びを作っていく必要がある。何を（内容・題材）どのように書くか（構成・推敲）を苦手としている児童が多い。書きたいという意識が大切でありスタート・原動力となる。それが学びに向かう力・人間性として、新時代の国語科学習へとつながっていくであろう。

## ■分科会II ■【六年 読むこと部会】

・単元名 物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考え、伝え合おう  
 ・教材名 海のいのち（東京書籍六年）

実践発表者 合志市市立西合志東小学校 教諭 内田 麻衣 先生

### 一 主な発表内容

○学びの土台づくりでは、既習の文学教材を使い読み方の技能の確認と「物語が自分に最も強く語りかけてきたこと」を考えることについてイメージをそろえることを行った。

○子供たちから出た問いを学習課題の解決につながる視点で吟味・精選しそれをもとに学習計画をたてた。そのことで、毎回の授業が学習課題の解決に向かっていくことを自覚しながら学習を進めることができた。

○話し合いにおいて、子供たちは、これまでの問いに対する答えや人物関係図、本文に書きこんだ気づきなど選択しながら、根拠や理由を明確にして説明していた。教科書を手に取って本文から学んでいる様子が見られた。児童の言い換えや教師の問い返しにより、既有知識やそれぞれの経験を引き出しながら理由づけを充実させることができた。

### 二 指導・助言 指導助言者 大津町立室小学校 村田 典子 先生

○既習教材「スイミー」を使い、一年時に気づけなかったことに気づく言葉の力、みんなに語りかけてきたところはいろいろな答えがあつていいことを伝えていた。さらに、「文章を置いてきぼりにしない」この言葉が印象的であった。

○授業導入時の前時の振り返りは意図的であった。「友達の考えがないと深まらない」など友達との対話の大切さを共有し、本時の学びの動機づけを行った。また、一枚にまとめられていた振り返りでは、先生のコメントがあり学び方を褒め、そこを強化していったことがすばらしい。振り返りを書かせるなら教師のフィードバックが必要である。

○学習方法の選択ができ、子供たちは自ら学習を調整することができていた。このことが主体的な学びにつながっていた。先生も、「そうなんだ」「今の意見どう思う」など出すぎず、子供たちの考えが響き合い高まり合う国語教室になっていた。子供の主体性を引き出していた。教師のコーディネーター、ファシリテーター力が大切である。

## ■講話■

演題 「学習指導要領の趣旨の実現を目指す小学校国語科の授業改善」

講師 文部科学省教科調査官 大塚 健太郎 様

### 【学習指導要領と令和の日本型学校教育】

学習指導要領は、育成を目指す資質・能力を三つの柱に整理しており、その着実な実施により二〇二〇年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」とした。

ICT等を活用した「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した。「個別最適な学び」と、これまでも大切にしてきた「協働的な学び」を一体的に充実させて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげてもらいたい。

### 【国語科の目標と言葉による見方・考え方を働かせること】

国語科は、言語活動を通して資質・能力を育成していくが、言語活動自体が目的ではない。

言語活動の結果、国語で正確に理解したり適切に表現したりする資質・能力を育成することが国語科の学びである。

言葉による見方・考え方を働かせるとは、対象と言葉、言葉と言葉との関係について、言葉の意味や働き、使い方等に注目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。

### 【学習評価の改善の基本的な方向性】

学習評価については、児童の学習改善や、教師の指導改善につながっているか。資質・能力の育成に、その評価は本当に必要かどうかを問い直すことが重要である。

## ■講演■

## 演題「考えたくなる、伝えたくなる国語科の授業づくり」

講師 安田女子大学教授 田中 宏幸 様

田中教授の軽快なお話ぶりに思わず引き込まれた。まず、子どもが考えたくなる、伝えたくなる「子どもが主人公」の国語の授業を作り上げていくには、四つのポイントが必要だと話された。

- 一 「驚き」や「葛藤」を引き出すこと
- 二 児童一人ひとりの「発見」を導くこと
- 三 「想」を言語化するための支援
- 四 伝えたいと思う「場」の設定

子どもたちが「えっ、どういうこと？」と疑問を持ったり、自分自身で発見したり、話型や文型を活用したり、何のためにという目的を持ったりすることが、子どもたちの主体的な活動へつながるということであった。

紹介された多くの実践例の一つ一つに、子どもたちの興味・関心を高め、子どもたちの学びを深める手立てがあった。

## ●実践例【変化や異同に着目した逆算式の読み】

白石範孝氏「逆思考の読み」(用語としては、「逆算式」の方が適切。)では、「どうしてこうなったの?」と結末部分を起点に因果関係を読み解いていく。冒頭部分と結末部分に注目し、生じた変化に「なぜだろう?」と逆に思考を働かせる。例えば、「お手紙」(アーノルド・ローベル)で「逆思考の読み」を用いると、結末部分から「どうして、二人はしあわせな気持ちになったの」という問いが生まれる。

藤森裕治氏は、物語世界に同化するために全員で役割を決めて音読劇をした後、「がまくんとかえるくんのしあわせは同じかな?」という問いについて第一印象を尋ねた。そして、子どもたちは、自分の考えの根拠を本文から探し、「バタフライマップ」という思考ツールを用いて、自分の立場と論拠を明確にし、思考を可視化していく。この「バタフライマップ」をもとにして学習者相互が対話することにより、子どもたちの思考が深まっていく。

このように「人物の変化」や「用語の異同」に着目した問いから、子ども

もたちの思考のスイッチが入り、主体的に読み深めていく授業となる。

## ●実践例【物語の心を一文でつかめ】

物語を「中心人物が○○によって〜する(〜になる)話」と一文で表す。

教科書に掲載されている物語は、中心人物の心の成長が描かれているものが多く、物語を一文でまとめるには、中心人物の行動や変化を読み解く必要性が生じる。そこで、子どもたちは課題意識を持って物語を読み、中心人物の心の変化に着目していくことになる。

重谷美保氏の授業では、まず、各自が物語を一文で表し、それを仮説とする。次に、心情の変化が表れている部分を短冊で示し、気持ちの変化を視覚的に捉え、それをもとに意見の交換や仮説の検証を行う。その過程で思考が整理され、心情の変化の根拠となる部分に対して自分の意味づけも加わり、再度、物語を一文でまとめたときには、さらに深い読みへと進化していく。

## ●考え方【発問の意義】

野口芳宏氏は、「人は問答を通して深く学ぶ」と言う。発問により、叙述に基づいて検討をする中で様々な意見と出会い、新しい価値が生産され、深い読み取りへとつながっていく。発問の機能は次の通り。

- ・ 漫然と読み過ぎしてしまいがちな、価値ある言葉に気づかせる。
- ・ 間違いに気づかせ、より正しい考えに近づける。
- ・ 表面的な読みに揺さぶりをかけ、より深い読みに導く。
- ・ 知らなかったことを教え、知識として定着させていく。
- ・ 比較・検討する中で、より優れた解に気づかせる。
- ・ 学んだことを現実の生活に生かす喜びを実感させる。

## ●実践例【「時系列作文」と「因果律作文」】

渡辺雅子氏の研究によれば、日本の小学生は時系列で、アメリカの小学生は因果律で文章を書くという。青山由紀氏は「からから煎餅」を題材にして「時系列作文」と「因果律作文」の二つを書かせた上で、文体の違いを比較し、メタ認知しながら、それぞれのよさやそれらに適した文種にも気づく授業を行なった。

田中教授が示された「読むこと」「書くこと」の様々な実践例において、子どもが主人公となる授業について大きな学びを得た時間となった。

## ■特別講演■

## 演題 「ことばの力」読書で育む想像力」

講師 重松 清 様

「日本の学校教育で国語を学んだら、もれなく僕がついてくる。」という笑いを交えた自己紹介から始まり、笑いや問いの中に考えさせられたり納得させられたり、そして元気をいただいたりと講演の時間はあつという間に過ぎた。重松氏の著書「カレーライス」「卒業ホームラン」等、数多くの作品が教科書に掲載されている。

## ① 本を好きになるきっかけ

中学校の国語の先生との出会いがなかったら、国語を好きにならなかった。自分の書いた文章を褒めてくれた。子どもたちを国語好きにしてほしい。少なくとも嫌いにしてはいけない。

本来、話を聞いたり読んだりすることは楽しいこと。音楽を聴くように本を読んでほしい。音楽を好きになったら楽器を演奏してみようかなと思うように、おもしろい小説をたくさん読んで「自分も書いてみようかな」と思ってみよう。子どもたちには、本を好きになるきっかけを与えてほしい。好きな先生、尊敬する先生の影響力は大きい。学校の先生は、親の他に唯一子どもたちの一番身近にいることのできる大人。先生つていい仕事。ものを書く、話すことを好きにしてほしい。

## ② 小説は、新しいものの見方を教えてくれる

小説の役割は、新しいものの見方を提示すること。「みんなはこんなふうに見ているけどこんな見方もあるよ。」と言葉を使って想像力を高める。(スライドを使って都道府県の地図をさかさまにしたり日本地図や世界地図を提示したりしながら見方を変える、ということを話された。)

一番怖いのは、見方が固定化されること。いつもの地図に慣れすぎるとそれ以外の見方ができなくなる。そもそも地球を一枚の平面図に表すには無理がある。メルカトル法などの世界地図に、正解も間違いもない、しかし完璧なものもない。それは、「その時のお父さんの気持ちや四十五字程度で書きなさい」というような問題と似ている。立体である地球を平面図に表すように、心という目に見えないものを言葉にすることは、本当はすごく難しいこと。四十五字では表せないから小説になる。正解に近いかわりにあつて間違いはない。

## ③ 言葉は思いに決して追いつかない

作家として、常に自分に言い聞かせている言葉がある。「言葉は思いに決して追いつかない」ということ。思いの方が言葉より勝る。言葉で百パーセント表現できるといえるのは、言葉を扱う人間の思い上がり。子どもたちが言葉で何か伝えたときは、それが正しかったかどうかより言いたかったことの何割を伝えられたのだろうと捉えてほしい。業間を読みなさい」というのは、言い換えると言いきれなかった部分の余白を味わうということ。余白とは、未完成の部分なのか、余白を美しく見せるためにわざと余白を作っているのか。それは分からない。

「かつ井とざるそば、どちらがおいしいか？」カロリーという物差しでは一目瞭然だが、おいしさは数字ではなかなか伝えられない。おいしさを表現するのが言葉。問答無用にさせないために言葉はある。

小説の中では、仲直りの話ばかり書いている。「なんとなく、ま、いいか。」と思うその瞬間を書いているつもり。けんかをして仲直りができればいいと思っている。言葉を介して他者とながる。他者を理解する。しかし、言葉は思いに追いつけない。

## ④ 国語の授業には、迷うことのできる豊かさがある

例えばエアコンを買うとき、どんなエアコンを選ぶか？それぞれの必要性、価値観等で必ず迷う、買った後も「やっぱりあつちがよかったかな」と悔やむ。迷う時間が凄く大事。たくさん迷わせてほしい。じっくり考え、たとえ間違えていても自分でしっかり考えて決めたい。待つ楽しさ、迷う幸せを捨ててはいけない。国語の授業には、迷うことのできる豊かさがある。自分の正解も他人の正解も大切にしてほしい。迷い、後悔を教えてくれる教科は国語だけ。「こんぎつね」がまさに後悔、迷い、等のネガティブな感情も含めて伝えられる。国語の持つ大きな力。小説を読むことで自分の人生が一つ増える。足りなかった栄養を味わってほしい。

最後に、「子どもたちが小説を好きになってもらうために書いている。嫌にならないようにお願いします。好きなまま、もっと好きにして中学校へ送り出してほしい。」と締めくくられた。

講演後は、重松氏の本を読んだ後のような充実感に包まれた爽やかな余韻が会場中に広がっていた。

## 第五十三回広島大会に向けて

広島大会実行委員長 岩 本 ゆ か

第五十三回全国小学校国語教育研究大会を、令和五年十一月に広島の前で開催する準備が進んでいます。広島市小学校教育研究会国語科部会は、全国からご参加いただいた国語科の授業づくりについて学びを深める機会に恵まれたことを大きなチャンスだととらえています。

本会では、令和二年度より「伝え合う力を高め、言葉の力を育む国語科教育の創造」を研究主題に掲げ、研究を推進してきました。三年目の令和四年度は、「子供たちの生活に生きる言葉の力の育成」―伝え合う力を高め、自分たちの学びを評価する力を高める―を副題に、会場校となる広島市立本川小学校、広島市立白島小学校の授業研究を核に、授業実践研究に取り組みました。感染症対策を講じた上で、公開授業研究会や実践発表を集合して行い、また、オンデマンドを活用して、広島大学大学院 人間社会科学研究所 教授 難波博孝先生、広島市教育委員会 指導第一課 主任指導主事 大下あすか先生のご講話を拝聴する機会を得ました。

国語科部会員全員を対象とした三回の研究会と、有志が集う国語同好会を通して、対面で授業を参観し、協議会を行い、話し手・聞き手がその場で意見交換を行うことが、どれほど参加者にとって意義深いことであったかを痛感しました。それぞれの会場で熱い議論が交わされたり、グループ協議で実践方法に関する情報共有を行ったりした成果は、参加した個々の会員のその後の授業に表れています。

オンデマンドでの講話は、研究会当日だけでなく、それぞれの勤務校で、それぞれが研究に向き合える時間に何度でも視聴でき、理解を深めることができました。実際に複数回視聴した国語科部会員から、「繰り返し視聴できるので、理解が深まった」という趣旨の感想が多数寄せられました。オンデマンドの利点を十二分に活用することの素晴らしさを改めて実感しました。

これらの成果を基に、研究部を中心に、令和五年度の全国大会と、さらに令和六年度以降の目指すべき姿を見据えながら、日々取組を進めています。

五月に広島サミットが開かれたことで、広島市は多くの皆様においでいただく環境が整いました。広島大会は、対面での集合開催をメインに、オンデマンドを併用して行います。広島を見て、歩いて、味わい、学び、高め合う大会を皆様とともに創り上げたいと願っています。

(広島県広島市立高南小学校校長)

## 【令和4年度 全小国研 第二回理事会報告】

令和五年一月二十六日、熊本市内にある「アークホテル熊本城前」で開催された。会長挨拶、開催地代表挨拶、名誉顧問の挨拶、そして報告及び審議が行われた。

## 一 中間会務報告

## 二 全小国研創立五十周年記念式典の報告

令和四年九月十一日 TKP築地カンファレンスセンターにて。

(第三十二回夏季実践交流セミナーと兼ねる形として開催)

○来賓に、水戸部修治氏、菊池英慈氏、大塚健太郎氏をお迎えして盛大に開催。大塚健太郎氏の記念講演を拝聴。

○シンポジウム「全小国研の功績と展望」

## 三 感謝状贈呈について

## 四 全国小学校国語研究所の研究について

## 五 今後の全国大会について

・広島大会 ・山口大会 ・宮城大会 ・東京大会

## 六 令和五年度広島大会について

## 七 各都道府県・政令指定都市の国語研究情報について

理事会終了に引き続き、総会が開催され、理事会で承認を得た感謝状の贈呈が行われた。

## 【感謝状】

熊本県小学校教育研究会国語部会

(今年度については、ハイブリッド型の参加・発表ということとなり、熊本大会主催の熊本県小学校教育研究会国語部会に贈呈した。)

第五十二回全国小学校国語教育研究大会 熊本大会について

令和五年一月二十七日 同ホテル内でオンライン開催